長野大学紀要　第22巻第4号　120―128頁（432―440頁）2001

宮澤賢治の詩《業の花びら》について

Propos sur la poésie《Les Fleurs du Karma》[1] par Miyazawa Kenji

関　戸　嘉　光*
SEKIDO Yosimitu

今回は、賢治の《業の花びら》と題する詩について、お話いたします。

この詩の日付は1924年10月5日となっていますが、ご存じのように、これは、この詩が作品として出来上がったときの日付ではなく、その着想の、発想のときの日付です。ですから、同じ日付の作品には、共通の感情、観念が、あるいは顕在的に、あるいは潜在的に、貫流しているのが感じられることしばしばで、これは当然というべきでしょう。

とくに《業の花びら》の場合、同日付に、もう一つ《産業組合青年会》と題する詩があります。この二つは、ほとんど一つの作品の第1部第2部として受けとってよい、受とるべきだと思います。したがって、話は当然《産業組合青年会》にも触れることになります。私がお話したいことは、本当は、この両者の接点にあるということを予めご承知おき戴きたいと思います。

まず、《業の花びら》です。

《業の花びら》と題する詩と申しましたが、そんな詩は校本宮澤賢治全集[2]（以下校本全集と略記）の本文には見出せません。この詩は、表題なしで、冒頭の詩句「夜の湿気と風がさびしくいりまじり」の1行を括弧つきで表題がわりにして出してあります[3]。

それにはそれなりの根拠があってのことでしょうが、これはどうも、私には戴きかねます。私にも、それはそれなりの理由があってのことです。原稿のその部分が破損散佚その他で現存しないのなら、そうした措置も止むをえないでしょうが、この場合は、そうではないのですから。

もっとも、校本全集は、校異として、この詩の下書稿(1)～(4)を出しています。それにはすべて「業の花びら」という表題がついています[4]。そして、その(5)にあたると思われる清書稿も現存していて、それには表題はついていません。

最終段階で賢治は、意図してこの表題を抹消したのでしょうか、それとも、ただ反復を避けただけなのか、あるいは《産業組合青年会》と一連の詩にするつもりだったのか。その辺りのことは我々には判断のしようがありません。原稿を直接手にとって検討する機会をもちえた校本校訂者の判断に従う以外にないことでしょう。

校訂者は、本文校訂の方針に従って、最終段階の清書稿を尊重し、それを忠実に復元しようとした、それでいいのです。

たしかにそれはそうではありますが、この場合、私は、下書稿(1)から(4)まで繰りかえして表題とされた「業の花びら」を捨てさるにはしのびない、表題として残しておきたかった、と思います。括弧をつけるなり、編者注をつけるなりすれば、原稿尊重の原則を犯すことにはならないでしょう。

校本全集は正に超人的な努力の成果です。賢治

* 名誉教授

の読者、研究者の誰もが、どれほどその恩恵に浴したことか。ただただ感謝です。

ではありますが、しかし、それを絶対化すること、権威化することは、やはり控えるべきでしょう。そんなこと判りきったこと、わざわざ断るまでもないことですが、校本全集については、私はあえてその無用のことをいっておきたいのです。

実例を一つ挙げます。童話《オツベルと象》[5]です。

校本全集が公刊されるまでは、これはすべて《オッペルと象》でした。

賢治の原稿は現存せず、残っているのは尾形亀之助編集発行の雑誌『月曜』[6]の創刊号に発表されたものだけだったため、校本全集はそれを底本にしたのですが、それには「オツベル」とあって、「オッベル」でも「オッペル」でもなかった。で、校本全集では、それまで広く「オッペル」とされてきたのを訂正して、「オツベル」と改めたのでした。

それはよろしい、当然です。

ですが、「オツベル」の読み（発音）はどうだったのか、オツベルか、オッベルか、の問題が残ります。当時はすべて旧仮名使いでしたから、オツベルと活字印刷されていても、オッベルと読んだかもしれません。旧仮名使いでは、拗音促音に捨て仮名は用いないきまりですから。

もう一つ。賢治自身のつもりでは、やっぱり「オッペル」だったのではないか、という疑問です。

ｂ音ｐ音ｍ音は、みな唇音ですから、混同されやすい。これは音声学上の一般法則です。私ども子どものころ、バス（乗合自動車）のことをパスといったり、デパート（百貨店）のことをデバートといったりするのを、よく耳にしたものです。煙りが、けむりでもけぶりでもあることは先刻ご承知ですね。

賢治にも、このｂ音ｐ音の混同があります。となると、「オツベル」も、「オッペル」のつもりだったかもしれない。という疑問を、私は打ち消しえないのです。

原子朗編著の『宮澤賢治語彙辞典』は次のように述べています。

「校本全集以前の全集や流布本ではオッペルとなっており、この童話の呼びかたも、すべてそれを踏襲していた。この作品は尾形亀之助主宰の『月曜』誌創刊号（1926・1）に発表されたもので、その雑誌初出稿以外の本文は、現存せず、それがオツベルになっているのだから、オッペルはいわれのない誤記ということになる。校本全集が初めて『月曜』初出稿どおりに正したわけである」[7]と。

これはいただけません。「オッペル」が仮りに誤記だったとしても、決して「いわれのない誤記」ではないこと、これだけはハッキリいっておきたいと思います。

賢治は自作童話を、弟妹や農学校の生徒たちに原稿段階で読みきかせることが、よくあったそうです。それを聞いた子どもたちの記憶から「オッペル」が由来した、ということも考えられます。

ともかく、「いわれのない誤記」とは、それこそ「いわれのない誹謗」でしょう。

しかし校本全集の権威は大したものです。その刊行以降、「オッペル」は殆ど完全に姿を消しました。すべて「オツベル」です。ヘソ曲がりのツムジ曲がりの私ひとり、孤塁を守って「オッペル」で押しとおしています。権威権力が大嫌いな私のアナーキスト的性向のさせる嗤うべき道化でしょう。

というわけで私は、校本全集の権威を無視して、校本全集では本文から抹殺された表題「業の花びら」を復活させ、序でに校本全集の校異をたよりに、下書稿(1)〜(4)の詩句を、重複を避けつつ復活させてみました。

賢治は最後の段階でそれを抹殺したかもしれません。いや確かに抹殺しました。しかし、そこには、あまりにも賢治らしい、賢治の生（なま）の息づかいが感じられます。私にはとてもそれを切り捨てる気にはなれません。

というわけで、決定稿の一つの手前の《業の花びら》をとりあげることを致します。

業の花びら[8]

夜の湿気と風がさびしくいりまじり
松とやなぎの林はくろく
そらには暗い業の花びらがいっぱいで

わたくしは神々の名を録したことから
〔山地の神々を舞台の上にうつしたために〕[9]
はげしく寒くふるへ[10]てゐる

ああ誰か来てわたくしに云へ
億の巨匠が並んで生まれ
しかも互ひに相犯さない
明るい世界はかならず来ると

しかもいったい
たれがわたくしにあてにならうか
どんなことが起らうと
わたくしはだまってひとり行くだけだ

……遠くでさぎが鳴いてゐる
夜どほし赤い眼を燃して
つめたい沼に立ち通すのか……
（祀られざるも
神には神の身土がある）[11]

松並木から雫が降り
そらのはるかな高みでは
風もごうごう吹いてゐて
わづかのさびしい星群が
雲から洗ひ出されては
その偶然な二っつが
黄いろな芒で結んだり
残りの巨きな草穂の影が
ぼんやり雲にうつったりする

以上です。下書稿(1)の欄外余白に詩句様の書きこみがあり、その内容は《産業組合青年会》に直接つながるものですから、それもここで下に示しておきましょう。

菩提(まだ)皮のマントや縄を帯び
いちにちいっぱいの労働にからだを投げて
みんなといっしょに行くといっても
そのときわれわれには
ひとつの暗い死が来るだけだ
あの重くくらい層積雲のそこで
北上山地の一つの稜を砕き
まっしろな石灰岩抹の億噸を得て
幾万年の脱滷から異常にあせたこの洪積の台地に与へ
つめくさの白いあかりをともし
はんや高萱[12]の波をひらめかすといっても
それを実行に移したときに
ここらの暗い経済は
恐らく微動もしないだらう
落葉松から夏を冴え冴えとし
銀どろの梢から雲や風景を〔制〕し
まっ青な稲沼の夜を強力の電燈とひまわりの花から照射させ
鬼げしを燃し（2字分空白）をしても
それが楽しくあるためにあまりに世界は歪んでいる[13]

《業の花びら》の詩句の順に、1924年10月5日の夜の賢治の行動の跡を辿ってみましょう。

会合が終わったのは、もう深夜でした。会場を出た賢治は、失望に打ちひしがれた思いを抱いて、夜の湿気と風のなかを独り歩きだします。とてもそのまま家路につく気にはなれなかったのでしょう。賢治は蹌踉として当てもなく闇の中を歩いて行きます。ゆくてには松と柳の林の黒い塊が立ちふさがっています。上を向けば、まっくろな空にいちめんの業の花びらです。鈍い銀色か、黄土色か、その花びらはときどき妖しく光ったことでしょう。賢治の心は、自分の内面への反省に沈んでいきます。

「いったい何をわたくしは願ったのだろう。何を実現しようと意図したのだろう。山や川や森や野原や大昔からの神々を、この近代の世に、近代的な科学技術を応用して、もう一度新しい粧いのもとに甦らせたい、それがわたくしの願いだったのだが……。身のほど知らぬ大それた願いだったのか……」。そう思って賢治は寒さにガタガタふるえます。そして、たまらなくなって、声を出して叫びます。

「ああ誰か来てわたくしに云へ。……明るい世界はかならず来ると」。

しかしその声は、虚しく闇のなかに吸いこまれていって、木魂も返ってきません。賢治は、あらためて孤独を思い知らされます。そして、黙って独り行くだけだ、他人を頼りにしてはならない。

そう自分にいいきかせます。

そのとき、どこか遠くで鷺が鳴きます。鋭い、叫ぶような鳴き声です。あの鷺はきっと冷たい沼の水のなかで、夜どおし1本脚で立ちとおすのだろう、その眼は今の自分のように熱い願で赤く燃えていることだろう、と賢治は自分の孤独を鷺に重ねて思います。……

夜の湿気は雫に凝って降ってきます。あのまっくろな空のさらにもっともっと高いところでは、風がごうごう吹いています。唸りをあげて吹きあれる強風です。『方丈記』がいう「業の風」か、良寛の「天上大風」か、それとも「六の宮の姫君」が臨終の幻覚のなかで「蓮華はもう見えませぬ。跡には唯暗い中に、風ばかり吹いて居りまする」といったあの風か。(『六の宮の姫君』[14]は芥川竜之介の短篇小説です。今昔物語集に拠った作品ですが、内記の上人が出てくる最後の場面は竜之介の創作です。私はこの短篇を彼の最高傑作とします。コレハ脱線)。

ごうごう荒れる風に雲はちぎれて流れます。その雲の間から、まばらにさびしい星が幾つか見えます。そのなかの二つの星が1本のすすきの穂で手をつなぐように結ばれています。それは偶然です。しかし賢治はそこに、小さな希望を見出します。それを大事に胸の奥にだきしめて、賢治は家路についたのでした。

この詩の焦点は「業」です。それを賢治はいみじくも「業の花びら」と表現しました。ほんとに賢治らしい表現です。大空いっぱいの暗い業の花びら、これは賢治の宇宙そのもの、花びらのその色は、冷色暖色といった分類の外でいえば悲色とでもいうべきでしょうか。

「業」という仏教用語は、中村元さんの『佛教語大辞典』[15]によると、一般的には動作・作用のこと、限定して人間の行為のこと、更に限定して人間の行為の善悪が因となって善悪の果を招く法則的な力のこと、とされています。わが国では特に悪業の意味に用いられることが多く、「つみ」と訓む例があげてあります。

賢治の場合はどうでしょうか。「くらい業の花びら」ですから、やはり悪業の、つみの色濃いものとなっています。賢治にとっては「生きる」ということそのことが業なのでした。自分が生きるためには、他の生きものの命を奪わなければならない、という業に支配されているこの世なのです。それから遁れるすべはないのです。

遁れえないなら、それを運命として肯定的に受けとめる、という別の途もありましょう。それはニーチェの途でした[16]。ニーチェはキリスト教の説く「愛」を、偽善として、ルサンチマン（ressentiment）として、奴隷道徳（Sklavenmoral）として厳しく斥けました。それに代えて、健康で力に満ちあふれた強者の道徳（Herrenmoral）を賛美称揚しました。

しかし、これは賢治の途ではありません。彼は反対に、常に弱者の立場にありつづけました。《よだかの星》の夜鷹(よたか)は、毎晩たくさんの生きた虫を食べて生きてゆかなければならない自分の生き方を、「あゝ、つらい、つらい」と歎き泣くばかりです。

ニーチェの途は、我々に負わされた「近代の運命」を打破するために避けて通れない一段階ですが、ここでは賢治が問題ですから、別の機会にゆずると致します。賢治の場合は、ニーチェが激しく排撃したキリスト教の愛の宗教との対比こそ必要だと思います。

仏教でいう業の観念は、キリスト教の原罪のそれに近いのではないか。たしかにそうも考えられます。だが、似てはいるが根本的に異質だ、と私には思われます。従ってまた、キリスト教でいう「愛」と仏教でいう「悲」また賢治における「悲しみ」との間にも、同じように異質なものを私は感じます。

愛はキリスト教では、とくに新約では、最も重要な観念です。

「たとひ我もろもろの国人の言(ことば)および御使(みつかい)の言を語るとも、愛なくば鳴る鐘や響く鐃鈸(ねうはち)の如し。假令(たとひ)われ預言する能力(ちから)あり、又すべての奥義と凡ての知識とに達し、また山を移すほど大(おほい)なる信仰ありとも、愛なくば数ふるに足らず。……げに信仰と希望(のぞみ)と愛と此の三つの者は限りなく存(のこ)らん、而して其のうち最も大なるは愛なり」[17]。使徒パウロの言葉です。パウロのこの「愛の宗

教」を得て初めて、キリスト教はキリスト教として成立したのだ、といわれています。

ところが仏教では、愛という観念に、倫理的にあまり高い価値を与えません。そのわけは、愛は憎と表裏一体をなしているものと考えるからです。詳しいことは前掲の中村元さんの辞典を読んでいただくとして[18]、簡単に要約すれば、次のようにいえると思います。

「愛が深ければ深いほど、その反面の憎も強くなる。肉親の愛、男女の愛、郷土愛、愛国心、これらすべて、その愛は本質的に自己を愛することに根ざす愛である。だから、そこから愁いが、怖れが、苦悩が生じる。この苦悩の中から人は嘆きの呻き声をあげる。それが悲（カルナー）である。カルナーの原意は『苦しみ悲しみの呻き声』である。それは、他人に共感を求める訴えであると同時に、他人の苦悩を理解する同情、あわれみの表現である。こうして、愛は悲を通して自己愛を超えて慈（マイトリー）に到る。マイトリーはミトラ（友）に由来する言葉で、従って慈は、友情、他人への思いやりという意味が根底にあるのである。仏教では、愛に代わって慈悲をとく。その究極として、無縁の大悲、つまりわたしが、だれに、どれだけ、という3条件を全く意識しないで、他者をしあわせにする無条件の大きな愛が説かれる」。

（中村元さんは私の2年先輩です。私が哲学研究室副手だったとき、元さんは印哲梵文研究室の助手で、よくお会いしました。柔和な腰のひくいお人柄で、何でも気やすく教えを乞うことができ、たいへん便利重宝しました。仏教の寛容の精神を絵に描いたようなかたでした）。

キリスト教の愛か、仏教の慈悲か、どちらに軍配をあげるか、そんなバカげたことをいおうとしたのではありません。

賢治の悲は、作品の到るところでお目にかかるのに、愛という言葉はほとんど出てこないが、これはいったいどうしたことでしょう、という質問が輪読会で出て、なるほど、そういえばそうだ、恋という言葉は目ざわりなほど頻繁に出てくるのに、と気づいたからのことです。

これは、賢治が熱心な法華経信者だったからとか、幼少時から南無阿弥陀仏信仰の家庭的雰囲気のなかで育ったからとか、そんなことで片づく問題ではないでしょう。が、いまのところ私も、何も確信をもってお答えすることができません。ただ、悲は、賢治の生活と作品の全体を一貫する根本感情、賢治独自の色調、とだけしかいえません。賢治の悲しさを、ほんとにそうだなあと共感をもって受けとることなしには、賢治の世界にちかづくことはできない、とだけはハッキリいえると思います。

賢治は、生きることの悲しさを胸の底の奥に抱きつづけていたのです。この悲しさは、いま申しましたように、共感を求めての嘆きの声となります。それを理解してくれる誰か一人を求めての訴えとなります。

その一人を賢治は、盛岡高等農林での学友保阪嘉内に見出しました。しかし嘉内は最後の段階で、賢治の国柱会への熱狂的傾倒についてゆけず、ついに訣別ということになりまします。1921年7月18日のことです。この間の事情については、菅原千恵子著『宮澤賢治の青春――ただ一人の友保阪嘉内をめぐって――』[19]にすぐれた評釈がありますから、ぜひ読んで下さい。私は目から鱗の落ちる思いがしました。

さて次に、《業の花びら》と同日の日付のもう一つの作品の《産業組合青年会》についてお話しなければなりません。

この詩は校本全集によると、清書された決定稿が残っているだけでなく、賢治の最晩年に詩誌『北方詩人』[20]に発表されもしたもので、形式的にも完成された作品です。発表にあたって、賢治はわずかですが訂正削除を加えていますので、下にその発表形を示します[21]。

産業組合青年会
祀られざるも神には神の身土（しんど）があると
あざけるやうなうつろな声で
席をわたつたそれは誰だ
……雪をはらんだつめたい雨が
　闇をぴしぴし縫つてゐる……
まことの道は
誰が云つたの行つたの

さういふ風のものでない
祭祀の有無を是非するならば
卑賤の神のその名にさへもふさはぬと
いきまき応(こた)へたそれは何だ
……ときどき遠いわだちの跡で
　　水がかすかにひかるのは
　　東に畳む夜中の雲の
　　わづかに青い燐光による……
部落部落の小組合が
ハムをつくり羊毛を織り医薬を頒ち
村ごとの、また、その聯合の大きなものが
山地の肩をひととこ砕いて
石灰岩末の幾千車かを
酸(す)えた野原にそゝいだり
ゴムから靴を鋳たりもしやう
……くろく沈んだ並木のはてで
　　見えるともない遠くの町が
　　ぼんやり赤い火照りをあげる……
しかもこれら熱誠有為な村々の処士会同の夜半
祀られざるも神には神の身土があると
老いて呟くそれは誰だ

以上です。夜半に及んだこの会合が終わって、賢治は闇のなかを、ひとり当てもなく歩き出したのでした。

賢治が請われてこの詩稿を『北方詩人』に送ったとき、彼は次のような手紙を編集人寺田弘宛に書いています。

「お手紙ありがたく拝誦いたしました。ご指示の原稿一応同封いたしましたがお役に立ちますかどうですか、若しお使い下さるなら、どうか名前を迦莉又は迦利としてお出しねがひたく、何とも失礼な申し分ですがあちこちへのおかしな義理があって止むを得ない点ご諒承ねがひあげます。(以下略)」[22]

迦莉とは？　宇井先生の『佛教辞典』[23]を引くと迦利王の項に「kāli また哥利・迦黎…。訳、闘諍・悪世無道。本生譚に現るる王、仏が前世に忍辱仙たりし時その肢体を割截したり」とあります。何かこれに関連した意味が諷されているのかもしれません。

また「あちこちへおかしな義理があって」とは、どういう事情だったのでしょうか。この詩が書かれたのは1924年（大正13）です。公表を受諾するこの手紙は1933年（昭和８年）、その間10年ばかりのへだたりがあります。ご時勢はガラリと変化しています。そこに原因があったのかもしれません。

大正末期から昭和初期にかけての10年余の期間は、左翼の思想と運動が一世を風靡した、近代日本の歴史上特筆すべき一時代でした。

例えば、有島武郎が『宣言一つ』を『改造』[24]誌に発表して、将来は第四階級のもの、ブルジョア階級に属するわれわれ知識人・文化人の出る幕でない、と主張して大反響をまきおこしましたし、芥川竜之介が『或阿呆の一生』のなかで10月革命の指導者レーニンをたたえて「君は僕等の東洋が生んだ／草花の匂のする電気機関車だ」[25]とうたった時代でした。

賢治も、農学校教師から羅須地人協会にかけてのこの一時期、左翼の実践活動に全身的にとびこんでいったのでした。《産業組合青年会》は、その頃の感情の表白です。それをそのまま持ち出しては、賢治の気持に変わりはなかったとしても、誤解を招くおそれもあったのかもしれません。

それはともかく、原稿は「迦莉」の筆名ではなく、宮澤賢治の本名で発表されました。これは賢治がその直後、９月21日に病没したためで、編集人としては筆名の必要がなくなったものと判断したのでしょう。詩誌は10月１日発行の10月号ですから、賢治没後の公表ということになります。

余談になりますが、この詩誌『北方詩人』という誌名にちょっとひっかかるものがありますので、一言します。というのは、あの生活綴方運動の機関誌『北方教育』にそれが無関係かどうか、ということです。

生活綴方運動もまた、大正末期から昭和初期にかけてのこの時期に、全国的にひろがった左翼的傾向の新しい社会・教育・革新運動でした。半封建的な地主制の前近代的日本農村のなかにあって、東北地方は特に、「東北型」といわれる遅れた地域で、その貧しさの故に、こうした運動も地域性とむすびついて、「北方」を強調する「北方性教育運動」などとして展開されたのでした。

詩誌『北方詩人』の「北方」にも、1927年（昭和2）9月のその創刊のときは、そんな思いが籠められていたのかもしれない、賢治もそんなことを感慨ぶかく思い出して、旧稿のなかから敢えてこの詩を選んだのではないか、そんなことをフト思ったのです。別に根拠も何もありません。ただの思いつきです。

しかし、いま申しましたように、羅須地人協会時代、とくに1928年（昭和3）2月20日の第1回普通選挙前後の一時期、賢治が思想と行動において社会主義共産主義に献身的に傾倒していったことは、無視してはならない事実です。賢治のこの側面を、あるいは無知のため、あるいは故意に、無視しようとしたがる詩人たちがいますので、繰りかえしになりますが、念のため申しておきます。

賢治にとってそれは、決して若気の至りでも、一時の流行かぶれでもありませんでした。彼の終生かわらぬ法華経信仰からの実践の一端でした。衆生済度の念願に燃えての菩薩行の一端でした。

その年の9月、賢治は過労と厳しい禁欲の粗食から、ついに病にたおれます。そして、一時の小康を得た期間もありましたが、本当に健康を恢復することは遂にありませんでした。

本題に戻りましょう。

《産業組合青年会》この詩の核心は「祀られざるも神には神の身土がある」、の1行です。その肝心の1行が、実は、私にはよくわからない。字引きを引いてわかるほどの字面の意味はわかりますが、この場に当てはめて具体的に何を意味するのか、どのような立場からそれが云われたのか、それを賢治はどう受けとめたのか、その辺のところが今一つ私にはハッキリしない。で、何となくこんなことのような気がする、といった程度のところでお話します。

イーハトーヴの農村の生活は、たしかに昔から貧しく寒く辛いものでした、そして今もちっとも変わっていません。この現実を前にして、

「それでいいではないか、それが俺たちの宿命なのだ、世間からみすてられたイーハトーヴだが、俺たちにとっては先祖代々うけついできたイーハトーヴだ、このままで、このままでいい、そっとしておいてくれ」と、半ば自嘲的にいうものがあります。

憤然としてこれに反論するものがいます。諦めは卑怯だ、もっと豊かな、人間らしい生活のできるイーハトーヴを志向して努力すべきだ、と主張するものがいます。激論がたたかわされ、いつ果てるともしれない、そんな会同だったのでしょう。

深夜に及んだこの激論のなかで、賢治はどちらの側に立っていたのでしょうか。諦め派か革新派か。これはハッキリしています。賢治はどちらの側でもない。といって、その折衷の中間派でもない。目の前の貧困は何としても救わねばならぬ、しかし、その実現は本当に可能か。賢治は、自分の非力と農村沈滞の重さを省みて絶望的な気持になったのではないか、そしてあらためて自分の孤独を思いしらされたのではないか。

なるほど賢治は《農民芸術概論》でうたいあげたように、ユートピアの建設を「ポラーノの広場」に夢みました。そしてそれに本気で取りくもうとしました。しかしそれが、現実的には不可能だということも、すでに身に応えて知らされていました。《産業組合青年会》に続けて《業の花びら》をうたわなければならなかったわけです。前者がことの外形の表現だとすれば、後者はその内面の告白だった、と受けとってよいでしょう。

それを裏づけるものとして、もう一つ賢治の詩をあげておきます。これは日付がついていませんが、おそらく2、3年後の羅須地人協会時代と推定される作品です。

火　祭[26)]

〔冒頭から18行を省畧―引用者〕
くらしが少しぐらゐらくになるとか
そこらが少しぐらゐきれいになるとかよりは
いまのまんまで
誰ももう手も足も出ず
おれよりもきたなく
おれよりもくるしいのなら
そっちの方がずっといゝと
何べんそれをきいたらう
　（みんなおなじにきたなくでない
　　みんなおなじにくるしくでない）

〔以下５行省畧―引用者〕
さうしてそれもほんたうだ
　（ひば垣や風の暗黙のあひだ
　　主義とも云はず思想とも云はず
　　ただ行はれる巨きなもの）
誰かがやけに
やれやれやれと叫べば
さびしい声はたった一つ
銀色をしたそらに消える

最後に、賢治の「悲」について、ひとことつけ加えて私の話をおしまいにいたします。

「悲」は賢治の作品のすべてに底流する根本的気分です。それを端的に表白した作品を一つ例として下にあげることにします。1922年５月21日付の詩です。この詩の最後の２行は、この「悲」に由来するその自覚形態としての賢治のあの捨身飼虎的自己犠牲願望ですが、これについては次回の主題にとっておきましょう。

〔冒頭原稿散佚〕[27]
堅い瓔珞はまっすぐに下に垂れます。
実にひらめきかゞやいてその生物は堕ちて来ます。

まことにこれらの天人たちの
水素よりもっと透明な
悲しみの叫びをいつかどこかで
あなたは聞きはしませんでしたか。
まっすぐに天を刺す氷の鎗の
その叫びをあなたはきっと聞いたでせう。

けれども堕ちるひとのことや
又溺れながらその苦い鹹水を
一心に呑みほさうとするひとたちの
はなしを聞いても今のあなたには
ただある愚かな人たちのあはれなはなし
或は少しめづらしいことにだけ聞くでせう。

けれどもたゞさう考へたのと
ほんたうにその水を嚙むときとは
まるっきりまるっきりちがひます。
それは全く熱いくらゐまで冷たく
味のないくらゐまで苦く
青黒さがすきとほるまでかなしいのです。

そこに堕ちた人たちはみな叫びます
わたくしが湖に堕ちたのだらうか
堕ちたといふことがあるのかと。
全くさうです、誰がはじめから信じませう。
それでもたうたう信ずるのです。
そして―さうかなしくなるのです。

こんなことを今あなたに云ったのは
あなたが堕ちないためにでなく
堕ちるために又泳ぎ切るためにです。
誰でもみんな見るのですし　また
いちばん強い人たちは願ひによって堕ち
次いで人人と一諸に飛騰しますから。
一九二二、五、二一、

あとがき――以上は今年８月７～９日箱根強羅静雲荘での賢治輪読会夏季合宿ゼミでの報告です。テープをもとにしたのですが、文章化するに当たって、恰好よくしようと多少訂正加筆しました。輪読会は1977年夏の北軽井沢での緑陰ゼミが発端でした。あれから23年、よく続いたものです。メンバーに出入りはありましたが、会の中心メンバーは今も変わりません。詩人たちには嗤われますが、私どもは、いわゆる賢治宗の信徒なのでしょう。

（2000．11．10　受理）

注
1）これでは《業の花》だ。《業の花びら》にはならない。が、ボードレールの《悪の花》（Les Fleurs du Mal）を連想してのこと。ただし賢治とボードレールとは全く異質の世界だが。
2）校本全集は1973年５月から77年10月にかけて筑摩書房から刊行された。全14巻15冊。編集人は宮澤清六・天沢退二郎・猪口弘之・入沢康夫・奥田弘・小沢俊郎・堀尾青史・森荘巳池の８名。しかし主として、天沢と入沢の２名が編集に当ったのではないかと思われる。
3）校本全集第３巻136頁。
4）同上539～544頁。
5）同上第11巻161頁、439頁。
6）同上439頁を参照。『月曜』誌は1926年１月１日創

刊。

7）初版は1989年10月東京書籍刊。改訂版が『新宮澤賢治語彙辞典』として1999年7月に発行された。私は未見であるが、「天気輪」その他の項で、必要と思われるその後の研究成果はとり入れられていないらしい。童話《貝の火》に関しては「蛋白石」が、項目としてあげられてあり、その鉱物としての説明が詳記されていること初版のまゝである。「ポランの広場」の項のポラーノの語源に、ロシア語をつけ加えたのはいいが、そのロシア語が正確でない。ポラーノはロシア語の поляна をエスペラント語化した形である。おそらくトルストイの「ヤースナヤ・ポリャーナ」が賢治の念頭にあったのだろうと私は推察する。

8）校本全集第3巻539～544頁を参照。

9）同上541頁上段、角括弧の1行は「前行ととりかえるつもりであったものか」という校本編集者の注記がある。

10）同上136頁では「え」となっているが、「へ」と私が無断訂正した。

11）同上542頁下段に「括弧の2行は×印で削除の印がつけてある」との校本編集者注記がある。

12）同上541頁下段の「萱」を「萱」と私が無断訂正した。

13）同上

14）芥川の短篇『六の宮の姫君』は岩波文庫本『地獄変その他』に所収。

15）中村元編著全3巻、1975年東京書籍刊。

16）ニーチェの『道徳系譜学』や『権力への意志』など。文庫本で数種の邦訳がある。

17）新約聖書コリント前書第13章。新共同訳聖書では「コリントの信徒への手紙一第13章」。

18）前掲中村元編著上巻14～15頁。

19）初版は1994年8月宝島社刊。角川文庫本、1997年11月刊。

20）1933年10月号。『北方詩人』については、校本全集第6巻962頁、および第13巻700頁に詳しい。

21）校本全集第6巻589頁、962頁。

22）同上第13巻448頁。

23）宇井伯寿監修、大東出版社1938年刊。戦後再版がある。

24）改造社の月刊総合雑誌『改造』1922年（大正11年）1月号。

25）岩波文庫本『歯車』所収。

26）校本全集第4巻193頁、590頁。

27）同上第2巻231～233頁。

（2000年10月25日記）